

1. はしがき 沈降濃縮, 真空ろ過, フィルタープレス, 遠心濃縮, 遠心脱水による汚泥の濃縮, 脱水機構と圧密理論で解析し, 汚泥内の平均有効応力とひずみの関係から変形仕事量と算定し比較考察を行った。

2. 平均有効応力 (a) 自重圧密: 平均有効応力 $\bar{\sigma}_s = \bar{E}_s$, $\bar{\sigma}_s$ = 水中の浮力を差引いた汚泥の単位重量, l_0 = 初期汚泥厚, μ_a = 圧密度, τ = 時間係数 $= C_v t / l_0^2$, C_v = 圧密係数, t = 圧密時間とし, 三角形荷重面について

$$\mu_a = 1 - \frac{32}{\pi^3} \sum_{m=1,2,\dots}^{\infty} \frac{(-1)^{m+1}}{(2m-1)^3} \exp\left\{-(2m-1)^2 \frac{\pi^2 \tau}{4}\right\} \quad (1)$$

$$\bar{\sigma}_s = (\bar{\sigma}_s l_0 / 2) \mu_a \quad (2)$$

(b) 定圧ろ過, フィルタープレス: P = 吸引圧力 (加圧力), R_d = うね (ろ布) の透水抵抗による圧力損失, $P - R_d = 1$ 定として, 上面不透水, 下面透水性 (両面透水性) の矩形荷重面として解析し

$$\mu_b = 1 - \frac{8}{\pi^2} \sum_{m=1,3,5,\dots}^{\infty} \frac{1}{m^2} \exp(-m^2 \pi^2 \tau) \quad (3)$$

$$\bar{\sigma}_s = (P - R_d) \mu_b, \quad \tau = C_v t / l_0^2 \quad (4)$$

(c) 遠心分離機: ρ_s = 汚泥密度, ω = 回転角速度, l_0 = 初期汚泥厚とし, 圧密による汚泥層の変位が遠心力に及ぼす影響を無視して解析すると

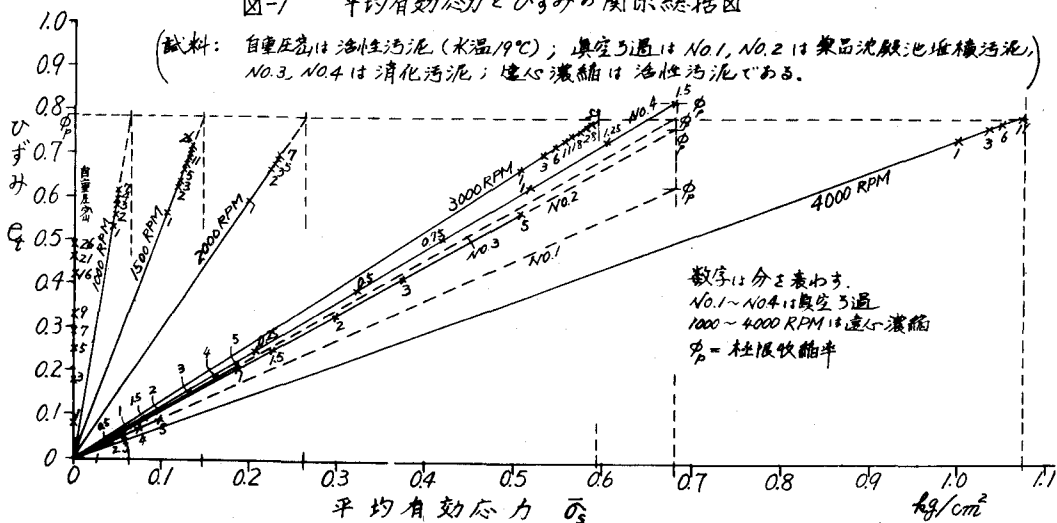
$$\mu_c = 1 - \frac{96}{\pi^4} \sum_{n=1,2,\dots}^{\infty} \frac{1}{(2n-1)^4} \exp\left\{-(2n-1)^2 \pi^2 \tau\right\} \quad (5)$$

$$\bar{\sigma}_s = \frac{\rho_s \omega^2 l_0^2}{12} \mu_c, \quad \tau = C_v t / l_0^2 \quad (6)$$

(d) 遠心脱水機: R = 回転軸中心から汚泥層初期表面までの半径, l_0 = 初期汚泥厚とおき, (c) と同じ仮定で解析して

$$\mu_d = 1 - \frac{12}{(3R + l_0) \pi^2} \left[(2R + l_0) \sum_{n=1,2,\dots}^{\infty} \frac{1}{(2n-1)^2} - \frac{4l_0}{\pi^2} \sum_{n=1,2,\dots}^{\infty} \frac{1}{(2n-1)^4} \right] \exp\left\{-(2n-1)^2 \pi^2 \tau\right\} \quad (7)$$

図-1 平均有効応力とひずみの関係総括図



$$\bar{\sigma}_s = (\beta_s \omega^2 l_0 (3R + l_0) / 6) \mu_d, \quad \tau = G \tau / l_0^2 \quad (8)$$

3. 平均有効応力とひずみの関係

(a)~(d)について、汚泥に負荷される外力は異ってもそれぞれの場合の平均有効応力 $\bar{\sigma}_s$ とひずみ e_s の関係は直線関係を示す。(a), (b), (c)につき、 $\bar{\sigma}_s$ と e_s の実測例による計算値と図-1に収括して示した。

4. 変形仕事量

Terzaghiの圧密理論の基本仮定であるバネ構造で示される完全弾性体としての取扱いのもとで、つながった組織の汚泥層の濃縮、脱水によるひずみは可逆的ではないが、特有の比例常数によって平均有効応力に比例するので、変形仕事に関するCastigliano氏定理⁶⁾と汚泥の場合に拡張して、 ΔV =変形量、 P =外力、 W =変形仕事量、 V =初期汚泥体積とおくと、直圧力による変形仕事量は $W = (\bar{\sigma}_s^2 / 2 E_s) V$ 、 E_s =比例常数であるので $\Delta V = 2W / \bar{\sigma}_s$ (9) が成立することが証明できる。

5. 変形仕事量とひずみの関係

(a)~(d)につき W/V を求めると

$$\left. \begin{aligned} (a) \quad W/V &= (\frac{E_s l_0}{2} \mu_d) (e_s/2) = \bar{\sigma}_s (e_s/2) \\ (b) \quad W/V &= (P - P_d) \mu_b (e_s/2) = \bar{\sigma}_s (e_s/2) \\ (c) \quad W/V &= (\beta_s \omega^2 l_0^2 \mu_c / 2) (e_s/2) = \bar{\sigma}_s (e_s/2) \\ (d) \quad W/V &= (\beta_s \omega^2 l_0 (3R + l_0) \mu_d / 6) (e_s/2) = \bar{\sigma}_s (e_s/2) \end{aligned} \right\} (10)$$

となり、いづれの場合も

$$W/V = \bar{\sigma}_s (e_s/2) \quad (11)$$

の関係が成立する。

6. 変形仕事量とひずみ計算例

(a), (b), (c) について上記理論による計算例を示すと図-2, 3, 4となる。

参考文献

- 1) 川島普: 水道協会雑誌, 226号, pp. 32-44, 昭28-8;
- 2) 川島普: 水処理技術, Vol.1, No.3, pp. 33-40, 昭35-8;
- 3) 川島普: 水処理技術, Vol.3, No.7, pp. 29-40, 昭37-7;
- 4) 川島普: 水道協会雑誌, 254号, pp. 31-42, 昭30-12;
- 5) 川島普: 水処理技術, Vol.2, No.2, pp. 33-38, 昭36-2;
- 6) 鳥部恒福平: 不飽和土理論と其応用, p.29, 丸文, 昭18-11

